

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0170200760		
法人名	医療法人社団 豊生会		
事業所名	グループホーム すぎの子の家		
所在地	札幌市東区東苗穂3条1丁目10-2		
自己評価作成日	令和3年2月25日	評価結果市町村受理日	令和3年4月6日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度の公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先URL	
-------------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉サービス評価機構Kネット
所在地	札幌市中央区南6条西11丁目1284番地4 高砂サニーハイツ401
訪問調査日	令和3年3月17日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者一人ひとりの思いに寄り添い、その人らしさを大切にケアを目指し、日々努力している。
 4月より管理者が変わり職員の体制が変わったが、『一人ひとりの思いを大切にすること』『相手の立場に立って考える事』『相手の良い所を探す事』の基本は変えず、入居者の言動を分析し、考える介護を目標としている。
 離職者も少なく、安定した事業所である事も変わっていない。
 コロナ禍であるため、委員会活動・勉強会等の集会は行えていないが、書面開催で行う等工夫し質を落とさないよう努力している。
 在宅支援診療所・管理栄養士・言語聴覚士・リハビリ職等と連携しながら安心して生活でき、また看取りまでしっかりと対応できる事業所を目指している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

グループホームすぎの子の家は、最寄りのバス停から近く、運営母体の医療機関や系列事業所、店舗等がある住宅地に立地している。保育園が1階にあり、中庭で遊ぶ園児の姿を利用者は窓越しから眺め手を振るなど、笑顔になる場面となっている。コロナ禍により面会や外出が制限ある中、職員は利用者と一緒に寄り添い、昔話を共有したり、思いを傾聴し、ケアの改善に生かしている。屋内で夏祭りを開催し、壁にはすだれに朝顔やスイカ、セミなど夏の風物詩をあしらひ、職員は浴衣や甚平を着て、手作りの神輿やおみくじ、屋台風焼きそばや焼きトウキビ、枝豆を用意し、雰囲気をもり立てている情景が写真から垣間見ることができる。家族からは、マスクの寄贈や感染予防対策に労いと感謝の言葉が寄せられている。職員は、「座って下さい」など抑制に当たるNGワードを掲げ、意識付けを図るなど、適切なケアに努めており、理念にある「ゆっくり・一緒に・楽しく・豊かに」の実践に取り組んでいる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します			
項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)		

自己評価及び外部評価結果

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の理念や年度目標を基に職員皆の意見を取り入れ理念や年度目標を作成し、共有・実践へと繋げる努力をしている。	職員で作上げた事業所理念「ゆっくり・一緒に・楽しく・豊かに」に加え、年度目標を掲げている。理念を掘り下げ具体的な支援のあり方を習得し、ケアに反映している。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	コロナ禍の為、ウェスの会や考流学舎との集いがストップしてしまっている。状態が落ち着いたら、再開し関わりを深めていく予定。	地域の情報は、町内会長や近所に居住している職員から得られているが、交流は自粛している。周辺を散歩中に行き交う人と挨拶を交わし、電話での介護相談に応じる程度である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方からの相談を受け付けたり、助言を行う事で認知症への理解を深められるよう取り組んでいる。		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍の為、運営推進会議は書面での開催としている。入居者の経過やホームでの取り組みを記載し、ご家族に郵送している。状態が落ち着いたら再開していく。	会議は、地域住民、家族、地域包括支援センター職員の参加を得て開催していたが、現在は、書面会議としている。議事録には、利用者の状況や活動内容、ヒヤリハット・事故の事例、感染症予防対策等を記載し、推進委員や家族に配布している。	
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議への参加は中断してしまっているが、必要時には連絡を取り、協力関係を築くようにしている。	市や区の各担当者とは、電話やメール、FAX、郵送で情報を共有している。困難事例が生じた時には、法人に相談し、指示を仰いだり、一任している。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	最少人数で2か月に1度のペースで身体拘束委員会を開催し現状を確認し合っている。事業所内では書面での研修開催を行い、拘束廃止への意識が低下しないよう努めている。些細な事でもヒヤリハットを提出するよう取り組んでいる。	身体拘束や虐待をしないケアの周知徹底に努めている。指針の整備、適正化委員会や研修会を適宜開催し、利用者が不快にならない支援に取り組んでいる。さらに「座って下さい」など、NGワードを掲げ意識付けを図っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日々の何気ない発言・対応に注意し、防止に努めている。気になる言動については、その場で注意指導し、職員間で確認し合っている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日々学んでいるが、活用できるレベルには至っていない。更に理解を深めていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居相談の時点から十分な説明を行い、契約するようにしている。		
10	6	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族来訪時や電話にて、個別で意見交換を行い検討し、運営に反映させるようにしている。運営推進会議が再開になった際には、会議内でも意見・要望を聴いていく。	家族には、感染症予防への取り組みに伴う面会や外出の自粛について、都度書面で報告している。利用者の様子は、電話や事業所便りに個別の写真とメッセージを添えて伝えており、家族からは、感染症対策について励ましの言葉が寄せられている。	
11	7	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	人事考課での個人面談や、日々の申し送り・カンファレンス等での意見・提案は無視せず受け止め、反映させるよう努力している。	ユニット会議は、予め職員から書面で意見や提案を収集し、業務改善やケアの見直しに生かしている。管理者による年2回の個人面談で、個人目標の達成度を確認し、スキル向上に繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年に2回の人事考課で評価し、秀でている職員は昇級等の推薦を行っている。個人目標を設定し、達成に向け支援している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	日々の業務を通して、個人・ホームの課題を見出し対策を考え提供している。資格取得を目指す職員に研修参加を促したりサポートを行っている。職員個人が理解を深めたい内容の研修があった場合には、参加を勧めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内の合同研修会・委員会活動を通して交流を図っていたが、現在は中断している。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	家族やケアマネ・サービス事業者から出来る限り情報を収集している。本人と話せる時には、本人からも話を聞いている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居相談の段階から、家族の思いを傾聴し、信頼関係が築けるよう努めている。契約の時点でも、時間の許す限りゆっくりと話を聴かせてもらっている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	収集した情報をもとにアセスメントを行い、初期プランの作成を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	共同生活者という視点を忘れずに、ICFの視点を念頭にケアを提供している。		
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日々の生活状況を伝える中で、家族の思い・過去の暮らし方等を聴き、協力を依頼したり共に支えていく関係を築けるよう努めている。		
20	8	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ問題以前は、出来るだけ来訪していただくよう取り組んでいた。コロナ禍になってからは、zoom面会や電話・居室の窓越しに手を振り合う等出来る限りの関わりを保てるよう努めている。	家族とは、電話や窓越し面会等で相互に安心が得られるよう努めている。併設の保育園児が中庭で遊んでいる姿に、利用者は目を細めている。職員は、利用者の昔話に相槌を打つなど、思い出を大切にしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	アクティビティや家事活動の参加等を入居者同士・職員と一緒にやって行ったり、談笑して温かな時間を過ごせるよう努めている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も相談を受ける事がある。本人が亡くなり退去になった後もウエスの会に参加してくれたり、ウエスを届けてくれる等ホームの事を気にかけてくれる家族もいる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	9	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	出来るだけ本人から聞き出せるよう努めている。正確な表現をできない入居者は、記録のつづきや欄から思いをくみ取れるよう努め、本人の立場になって検討するようにしている。	利用者の状態により、会話の中や行動から要望や意向を汲んでいる。介護記録には、つづきやその時々動きを記録しており、思いを押し量るヒントになっている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に家族に『情報収集シート』の記入を依頼し、サービス事業所からの情報等をもとにインフォメーションシートの作成を行っている。入居者の理解に活用できている。入居後1か月程度は、情報収集シートを作成し、得た情報を職員間で共有しケアに生かしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の送りで入居者の状況の把握と伝達を行い、情報を共有するよう努めている。		
26	10	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族の意向をもとに 各担当者と計画作成担当者がプラン作成を行っている。状況により担当以外の職員からも意見を聴きアセスメントしプラン作成へとつなげている。	毎月の会議で利用者の全体像を話し合っている。ケアプランの定期見直しや状態変化時は、担当職員によるアセスメントや医療従事者の所見、介護記録、利用者や家族の意向を反映して、支援目標を立案している。支援目標と介護記録は連動し、実践が確認できる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録が「見える」「伝える」「使える」記録となるよう取り組んでいる。4月からは、新システムも導入し始めていく予定。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	法人のNPO団体との交流やサロンの活用等を行っていたが、現在はコロナ禍でありストップしている。状況が落ち着いたら再開していきたい。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の方に避難訓練・ウエスの会・運営推進会議等に参加していただきホームへの理解を深めていただくようにしていたが、現在はストップしている。		
30	11	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	訪問診察時には職員が対応し現状を詳しく伝えている。他医療機関受診時も職員が付き添い、手紙もしくは口頭で状況報告を行っている。	受診先は利用者や家族の意向に沿っているが、現在は、利用者全員が月2回協力医の訪問診療を受けている。他科の外来受診は、家族と協力して支援している。訪問看護師は、利用者の健康管理と職員からの相談に応じている。	

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問診察時同様 職員が対応し、現状を詳しく伝え相談し、指示を仰ぐようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は介護添書と口頭で説明し、正確な情報を伝えられるように取り組んでいる。入院中は出来るだけ面会をしたり、病院職員に確認する事で状態把握をし退院後の生活につなげられるようにしている。		
33	12	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	入居時に看取りについて説明し、状態が変化してきた段階で再度確認を行っている。常に医療と連携を取りながら、家族も交えて今後の方向性を確認している。	重度化や終末期に関しては、入居時に指針に沿って説明している。職員は、看取り研修や経験を積んだ職員からの学びもあり、体制が整備されて看取り支援が開始される時は、厳かな時間を共有している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的に勉強会や申し送り等で知識を確認している。急変・事故などあった後には、対応が正しかったか確認し振り返りを行うようにしている。		
35	13	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に訓練を行い、消防から指導・助言も受けている。万が一の時には、町内会長他地域の方に協力して頂くよう依頼している。	年2回、日中想定 of 火災避難訓練と夜間想定 of 地震後の火災避難訓練を実施している。新人職員は、優先して訓練に参加している。災害時備蓄品や備品も随時用意し、緊急時は法人本部や系列事業所と協力体制にある。	危機管理を高め非常時に備えているが、さらに緊急連絡網に町内会役員の登録、入浴時などケア場面での対応、地域との協力体制の強化に期待する。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	14	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとり 個人に合わせた言葉かけや対応を行っている。	接遇については、日常的に赤ちゃん言葉は使わない、入浴や排泄、着替え時は羞恥心に配慮するなど、利用者の立場に置き換えた支援に努めている。個人記録の取り扱いも適切に行われている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言葉で言い表せない人にも目線や指を指す等して選んでもらえるよう工夫したり、些細な事でも出来るだけ思いを表せるよう取り組んでいる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	DTの考えを大切にし一人ひとりの楽しみ、その人らしさを考え対応するようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洋服を選んでもらったり、髪分け目を決めてもらったり、出来る限り好みを聴き対応するように取り組んでいる。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	15	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	嗜好や季節の物を取り入れ楽しく美味しく食べられるよう努めている。STの指導も受け安全に食べられるよう配慮している。味見してもらったり片付けも一緒に行っている。	朝食と夕食は、業者から配達されている。昼食は、利用者の要望と在庫の食材でその日の献立を立案している。誕生日は要望の寿司やハンバーグなどを作り、焼きそば、焼きとりで屋台風、時には、行事食は出前を頼んでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	医療機関・管理栄養士の助言を受けながら、個人に適切なカロリー・水分量が確保できるよう努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後 口腔ケアを行っている。必要な人には歯間ブラシや義歯用ブラシ、うがい器が困難な人にはスポンジブラシを使ったり、個人に合わせて対応を取っている。		
43	16	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来るだけトイレで排泄出来るよう支援している。尿意を訴えられない人にも、個人のサイクルで誘導し、失禁の予防に努めている。	自力排泄者を見守り、声かけや誘導を行い、トイレでの排泄を基本として支援している。職員の努力により布下着の着用が可能になった事例がある。失敗や不快感の軽減に繋がる支援が行われている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘傾向の方が多く、牛乳の提供・運動・腹部温電法等 を行っている。今年に入ってからはR-1の提供も試みている。		
45	17	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	当日朝の申し送り時に入浴について検討している。個人の体調・希望に沿いながら対応できるよう努めている。	入浴は、週2回を目途に支援している。足湯にシャワー浴もあるが、殆どは職員の支援で入浴剤入りの湯船でリラックスしている。入浴が楽しい時間になるよう、利用者と会話や一緒に歌うなど、コミュニケーションを取っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は個人に合わせて臥床時間をとっている。夜間は良眠出来るよう 体操等のアクティビティで身体を動かし適度な疲労感を感じてもらおう取り組んでいる。午前中に出来るだけ日に当たる事も意識している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬表での処方内容の確認・変更の把握等の周知徹底に努めている。薬の注意点などには都度薬剤師から指導を受けている。症状に変化が見られた時には都度医師に報告している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の生活の中で『楽しい』と感じられるよう個人の好みや生活背景を生かした活動の提供を行っている。季節の行事も行っている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	18	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	夏場は出来るだけ散歩へ出たり、ホーム周辺の花を見に行く等 屋外に出るよう努めていた。現在は、感染予防のため外出は出来ない。状況が落ち着いたら、買い物や外出への支援を行ったり、家族の協力のもと自宅への外泊等も再開させたい。	自肅により外出の行動範囲は狭められるが、個別に公園など周辺の散歩、玄関にあるプランターの花に水遣り、窓を開けて外気を取り込んでいる。利用者は、身体機能維持のために階段の昇り降りや体操に励んでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分での金銭管理が困難になっているため、お金の所持をしている人は少ない。所持している人も外での使用は出来ない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望時、ホームの電話を使用し家族や知人と話してもらっている。手紙を書いてお孫さんに送る方もいる。		
52	19	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	換気をしつつも、可能な限り温度・湿度の配慮している。不快にならない範囲でカーテンを開け日光を取り入れる事も意識している。季節に合わせ様々な装飾を行い、目で楽しめるようにしている。	感染予防対策をしているフロアには新聞や本が置かれ、壁面には、季節飾りや利用者の作品である塗り絵、習字などを飾っており、親しみある生活空間になっている。半数ほどの利用者は自然とフロアに集い、思い思いに過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアは狭いが、座席位置への配慮や、一人テーブルを使用するなど、一人ひとりが心地よく過ごせるよう取り組んでいる。		
54	20	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に、自宅に使っていた馴染みの物があれば持参して頂くよう伝えている。家族の写真を飾ったり、好みの物を置いて安心できる空間になるよう工夫している。	6畳ある居室には生活必需品の家具類、行事や家族の写真、絵手紙や俳句など個人の作品等を飾り、自分の住まいとして環境を整えている。居室は、休憩や寝る場所であり、安らげる空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室には名札をつけ、トイレ等 迷う場所には貼り紙をしたり、出来るだけ自力で動くことが出来るよう工夫している。		